

堅果類豊凶調査 (H28-30)

高田敦史・和口美明

1. 背景と目的

近年、クマ類の人里付近への出没が各地で問題となっており、事前の出没予測に基づく被害の軽減が求められている。クマ類の主要な餌資源となる堅果類の結実状況は秋期の大量出没に関連するとされ、各地で継続的な調査が実施されている。奈良県においても、ツキノワグマ保護管理計画の遂行のために出没予測を実施することとなり、堅果類の豊凶を調査している。本調査では奈良県全域における堅果類の豊凶とツキノワグマの出没状況を比較することで、出没に影響すると考えられる樹種を特定し、その豊凶の変動について把握することを目的とした。

2. 材料と方法

コナラ、ミズナラ、ブナの3樹種を対象とし、8月上旬から10月下旬に奈良県全域で調査を実施した。平成27年度から平成29年度はアラカシについても調査を実施した。各樹種の調査地点数を表1に示す。各調査地点で供試木を選定して双眼鏡で観察し、樹冠1m²あたりの結実数から豊凶度を4段階(0~3)で判定した。供試木10本の豊凶度の平均値を各調査地点での豊凶指数とした。また、農業水産振興課鳥獣対策係から奈良県内でのツキノワグマの出没状況について情報提供を受け、秋期(10~12月)の出没件数を集計した。

表1 調査地点数

	H25	H26	H27	H28	H29	H30
コナラ	38	68	69	69	69	10
ミズナラ	18	21	24	24	24	23
ブナ	16	18	19	19	19	18
アラカシ	-	-	10	12	12	-

3. 結果と考察

各樹種の豊凶指数の平均値と秋期のツキノワグマの出没件数を図1に示す。コナラ、ミズナラ、ブナの3樹種については、隔年で豊凶を繰り返す傾向であったが、アラカシは調査を実施した3年とも豊作であった。平成29年度までの結果から、ミズナラ、ブナは豊凶の変動が大きく、凶作年のツキノワグマの秋期の出没件数が多くなることから、ミズナラ、ブナが出没に影響する樹種であると考えられた。平成30年度は凶作であったため、ツキノワグマの秋期の出没件数が多くなることが予測されたが、実際に報告された出没件数は秋期で3件、年間で10件と例年よりも少なく、昨年度までの傾向には当てはまらなかった。今後も調査を継続し、調査地点の増設や選定によって予測精度を向上するとともに、堅果類の豊凶以外にツキノワグマの出没に影響する要因についても検討する必要があると考えられる。

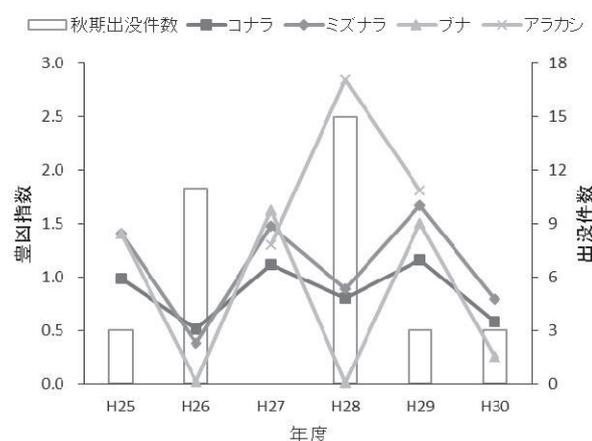


図1 各樹種の豊凶指数と秋期のツキノワグマの出没件数